寺社Now

www.jisya-now.com

寺社の"いま"を伝える情報誌

vol.22

巻頭インタビュー

鵜戸神宮宮司
宮崎県神社庁 庁長

本部 雅裕

特集 1

映画やドラマのロケ誘致が、
寺社の活性化につながる

フィルムコミッションとのタッグで魅力を発信

特集 2

海外発！ 死をカジュアルに語る新たな場

日本でも「デスカフェ」拡大中

寺社Now

寺社の“いま”を伝える情報誌

Vol.22

02 巻頭インタビュー
重層的につながる信仰を伝え続ける
鵜戸神宮 宮司
宮崎県神社庁 庁長
本部雅裕

08 新風
神道青年全国協議会がインスタグラム神社フォトコンテストを初開催
浄土宗 総本山知恩院の特設ページが話題に
VR技術で文化財を鑑賞する作品製作がスタート

特集1
映画やドラマのロケ誘致が、寺社の活性化につながる
フィルムコミッションとのタッグで魅力を発信

10 国を挙げた支援体制でロケ誘致が活発化

12 天台寺門宗 総本山園城寺(滋賀県)×滋賀ロケーションオフィス
ロケに協力することで新たな参拝者と出会え
気付いていなかった自坊の魅力もわかる

14 祐徳稲荷神社(佐賀県)×佐賀県フィルムコミッション
ロケ地ブームは終わってからが勝負
ニーズを読み取り一歩先ゆく努力を

16 ジャパン・フィルムコミッション田中まこ理事長に聞く
「ロケで活性化する方法」

伝統を未来へ〜From the Past to the Future〜

18 「寺社は氏子さんたちのもの」と神道を広める、
千葉県・熊野神社宮司 宮田修

19 「仏教伝道文化賞沼田奨励賞」を受賞した、
漫画家・イラストレーター みうらじゅん

うちのお宝

20 天台宗吉祥陀羅尼山 薬樹王院滝山寺 聖観音菩薩立像

21 湊川神社 段威腹巻

22 特集2
日本でも「デスカフェ」拡大中

26 全日本社寺観光連盟「社寺観光研究会第3回会合」を9月に実施
野田理事が広島県神社庁研修会にて講演

28 テラハクレポート／真宗大谷派 月象山了廣寺(熊本県)

30 [特別寄稿]野田博明「風まかせ」
第22回「白にあらずして黄なると、城は誠に奇妙なり」

土地を活かす。地域が活きる。

土地活用とは、土地の価値を地域に活かすこと。積水ハウスは、住宅のリーディングカンパニーとして培ってきた総合力で土地の可能性を引き出してきました。入居者の多様なニーズに対応する賃貸住宅「シャーメゾン」や高級感あふれる中高層マンション、時代が求める高齢者向け住宅など、地域貢献につながる土地活用を積水ハウスがご提案します。

SEKISUI HOUSE

積水ハウス株式会社 大阪特建支店
〒531-0076 大阪市北区大淀中1-1-93 梅田スカイビルガーデンシックス4F

特建くん
©積水ハウス2005

土地活用に関するご質問やご相談についてもお気軽にどうぞ。
0120 FreeDial 0120-131-470 大阪特建支店 検索

資料をご希望の方は、フリーダイヤルでご請求ください。
ホームページからもお申し込みいただけます。

積水ハウスの賃貸住宅
「シャーメゾン」総合カタログ

積水ハウス大阪特建支店 実例集
「Best Solutions」

巻頭インタビュー

鵜戸神宮（うどじんぐう）宮司
宮崎県神社庁 庁長

本部 雅裕

ほんぶ まさひろ

本部 雅裕

昭和26年生まれ。国学院大学卒業後は鵜戸神宮に奉職、その後に国語科・社会科非常勤講師として教鞭も執る。平成20年より鵜戸神宮宮司、平成28年には宮崎県神社庁 庁長に就任。「小さな神社のお手伝いができれば」と神職の知識・教養を高めるための研修会などで日々奔走する。実家である春日神社（宮崎県児湯郡新富町）の31代宮司も務めた。

神代から人の世へ 重層的につながる信仰を 伝え続けるために 動いていく

■宮崎県は神話の故郷であり、記紀に見られる多くの神々が県内の各神社に祀られています。中でも日南海岸国定公園にあり、山幸彦（ヤマサチヒコ）・海幸彦（ウミサチヒコ）の神話の舞台としても知られる鵜戸神宮（うどじんぐう）は豊玉姫命（トヨタマヒメノミコト）のご出産の逸話によって古くから安産祈願の場所として、また昭和の時代には新婚旅行の目的地として多くの参拝者が訪れてきた人気の神社です。

近年はインスタ映えスポットとして若い世代にも認知され、平成29年には神社を含む地域一帯が国指定名勝となった鵜戸神宮では、その魅力を幅広い世代に伝え、また2000年の長きにわたって続いている歴史を後世に伝えていくため、地域との連携も積極的に進めています。

その取り組みと今後の展望について、平成28年に宮崎県神社庁庁長に就任された本部雅裕宮司にお話を伺いました。

神話の時代から修験の地へ 信仰が歴史をつなげた

――「鵜戸さん」と地域で古くから親しまれている鵜戸神宮には、神話の故郷、景勝地など、さまざまな魅力があります。

鵜戸神宮の御祭神は鸕鷀草葺不合尊（ウガヤフキアエズノミコト）、つまり神武天皇の御父君です。歴史的に見ると神代の最後に出てこられて、そこから人の世が続くのですが、神代であって人の世、その接点におられる神様というものが鵜戸神宮の御祭神の一番の特徴だと思います。20世紀の知の巨人と言われたフランスの文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースが「神話で語られている出来事は本当にあったことだと、私自身思ってしまった」と、鵜戸神宮を訪ねた際の印象を語っています（『言葉と沈黙』江藤 淳著・平成4年）。神話と歴史を厳格に区別する西洋の知識人が、神代が人の世へつながっていくという日本人の連続性を強調したことは、とても感慨深いものがあります。

当社は第10代崇神天皇の世に創建されたと言われていますが、その後、桓武天皇の時代に光喜坊快久（こうきぼうかいきゅう）という人が来られて荒れていたお山を再興し、鵜戸山大権現吾平山（あひらさん）仁王護国寺の名を賜わりました。その時は天台宗で、その後真言宗に変わるのですが、真言宗の時代は「西の高野」と言われるくらい、参詣者、修験者が多かったと言われています。

現在の日南市全域と宮崎市南部を治めていた飫肥（おび）藩は大阪の両替商油屋善兵衛から資金の提供を受け、産業開発の一環として楮栽培と紙の製造を計画した。事業の成功を祈念して善兵衛が奉納した石灯籠が楼門近くにある

信仰は郷土愛を育てる。未来のためにも、その流れを絶やさない

修験道の信仰もあり、山伏がたくさん来ていたようです。このように神話の時代を経て仁王護国寺があり、神社の本殿には神様が祀られているという、重層的な信仰も鵜戸さんの特徴ではないでしょうか。残念ながら仁王護国寺の建物は昭和45年の大火で焼けてしまいましたが、往時には本参道の両脇に12の宿坊もあったと言われています。つまりいろいろな信仰が重なり合い、歴史がつながっているのです。この重層的な信仰を伝え続けるために、私は動いていかなければと考えています。

民間伝承が信仰へ さらには郷土愛を生む

地域では神話が今でも広く知られていて、鵜戸さん信仰が神社と地域をつなげていると聞きます。

都会のように毎日何10件も、というわけではありませんが、歴史的に安産の神様として信奉されていますので、昔も今も、安産祈願の方はいらっしゃいます。この例だけを取っても、ここには神話がそのまま生きていると言え、それが鵜戸さん信仰の大きな柱ですね。鸕鷀草葺不合尊がお生まれになったいわれが民間信仰として生きているのです。豊玉姫命は安産だった、鵜の羽で屋根を葺き終わらないうちにお生まれになったのでこの名前がついた、というのが今も伝わっています。興味深いのは、古事記や日本書紀での記載は限定的であるにもかかわらず、鵜戸さんの信仰の歴史の中では深く広く話が受け継がれていること。お乳岩の逸話も同様で、そのことが育児の信仰を生み出しています。もう一つ、日本書紀には豊玉姫命はご出産に際し、大亀に乗って海を赤々と照らして来たと具体的に記されています。そこで当社の運玉ですが、玉を投げ入れる岩を亀石と言います。長い歴史の中でいつしか、運玉を投げる岩は豊玉姫命が乗ってこられた亀だ、という伝承となってきたのです。やがて年間を通じて子供たちが運玉を造ってくれるようになり、地域の思い出が信仰と一緒になるという、非常に珍しいケースとなっています。この記憶が、都会で暮らしていても故郷を大切に思うという郷土愛をも生み出しているのです。

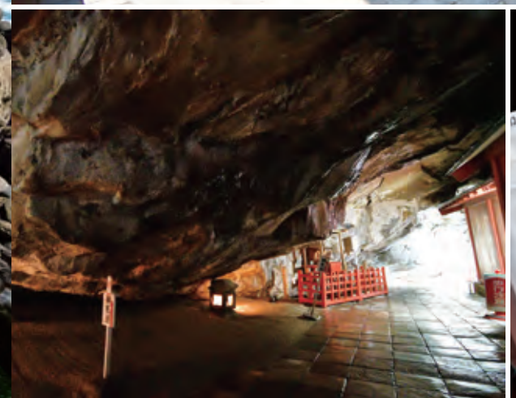
地域との結びつきを新たに作り出していく

その一方で、全国的に地方での人口減少が叫ばれる現在、鵜戸神宮のある地域でも同じような悩みがあると思います。そのために進められていることはありますか？

鵜戸神宮周辺には3つの地区がありますが、少しずつ人口が減ってきています。何より若者がいない。3地区合わせると10人ほどです。新婚旅行ブームのあった昭和40年代、一時期神社と地域との心が離れていた時期がありました。それではいけないという反省に立ち、地域あっての神社、氏子さんあっての神社だという気持ちで今は活動しています。以前から敬神婦人会が形だけあったのですが、もっと参拝してもらうため、月の初めの卯の日に開催している縁日祭を活用し、敬神婦人会会員のうち、その月に誕生日を迎える人のお名前を申し上げ、健康長寿、家庭円満を祈るようにしました。すると、その時にお参りに来てくれる人が増えただけでなく、役員を中心に敬神婦人会を再結成するという動きも起こりました。

また、若者が鵜戸神宮職員として奉職するようにもなってきています。そのような若者には、地元に密着していくためにも要請があれば消防団に入るようにアドバイスしています。消防団員として活動する日は出勤扱いにするなど神社としてもバックアップし、神職をどんどん地域へ出すようにしています。正直なところ、正月は消防団の出初式も

日向灘に面した断崖の中腹に岩窟があり、そこに本殿が鎮座する。本殿までは石段を下って行くが、眼前に広がる景色は息を呑むほどの美しさで、参拝者を魅了し続けてきた



上／洞窟内に建つ朱塗りの本殿。屋根を銅板で保護しているが、塩害と湿気の対策が急務。しかし県指定文化財であるため、新たな技術の導入などが課題となっている。
下／伝承にある「お乳岩」が本殿裏に。そこから滴り落ちる水でつくった「おちちあめ」も古くから知られた授与品

歴史を見つめ直し信仰・文化の伝承、そして観光振興へ

かつては亀岩のくぼみに向かってお賽銭を投げていたが、地域の子供たちが毎週月曜にそれを拾いに来るために学校に遅刻する事態となり、現在の形になったという運玉。縄の輪の中に当たれば良し、窪みに入れば尚良しとされる

あるため神社は手薄になり大変ですが、何より、若者が生き生きとしてきますから。さらに、子供のいる神職にはPTAの役員にも積極的に就くように助言しています。地域では役員のなり手が不足しているようですが、そのままにしておくと地域が廃れていくため、神職が少しでもお役に立てればと考えてのことです。

神社の歴史を再発見し整備して観光振興へ

――平成29年に国指定名勝となり、信仰を守り、伝えていくことが一層重要となってきました。

指定の理由は自然環境絶景の地ということ、重層的な信仰、そして地域がずっと見守って育ててきた点でした。ですから指定されたのは当社だけでなく、当社を含む海岸線一帯となります。地域が鵜戸さんに対する信仰を誇りに思う気持ちを認めていただいたということで、地域の人にも喜んでいただけました。宮崎県としては戦後初の指定となりますので、県民にとっても大きなニュースだったと思います。

しかし、喜んでばかりはいられません。当社は海沿いにありますので、塩害を防ぐなど、より一層保全に力を入れる必要があります。名勝に指定された以上、いろいろと大変なこともありますが、創建から2000年の長きにわたって続いてきた信仰を未来へつないでいくための大切な作業だと考えています。その先に、地域振興のための存在意義も生まれてくるのではないでしょうか。

鵜戸神宮は日南海岸の一番北にありますから、私は当社が県南観光の入り口だと考えています。まず鵜戸神宮に来ていただき、そこから県南などさまざまな方面へ観光の動線が伸びていくイメージです。そう考えると当社は立地的に重要な場所となります。観光の動線を活性化していくためにも、当社からの情報を積極的に発信していくことが大事だと思います。

また、本参道沿いの宿坊があった場所を整備することを、宮崎県や日南市はもちろん、文化庁にも働きかけています。現状は山になって石垣だけが残っている状態ですが、発掘調査をしてみると山伏の法螺貝が出てくるかも知れませんし、もっと重要な修験の法具なども見付かるかも知れません。新しく建物を建てるのは難しいかも知れませんが、長い歴史を感じてもらう学びの場を造るだけでも大切なことではないかと感じています。

豊饒の海と豊かな森に抱かれた鵜戸神宮。楼門から本殿へと続く千鳥橋は特に景色が良い場所で、ここで記念撮影をする参拝者も多い。本部宮司は境内の散策を日課にしている

これからの世代へ信仰を伝えたい

――鵜戸神宮のこれまでの姿は長い歴史の中での信仰そのものなのですね。それを伝えるために、山全体の整備もお考えだとか。

参道周辺だけではなく周囲の山林も往時の姿に戻して行かなければなりません。現在当社の周囲は杉山になっていますが、明治以前はタブや楠が茂る山だったようです。タブや楠は根がしっかり張りますので、山の植生をそれらの木々に戻していくことは、防災の観点からも大変重要なことではないでしょうか。そのために今、かつての林相をとり戻す計画を少しずつ進めています。

森がよみがえれば、そこには動物が集まって来ます。何よりここは昔からの山ですので、珍しい植物が多いことでも知られているのです。林相を昔に戻すことで、その植生もより豊かになると確信しています。すると将来的には信仰だけでなく、自然に親しめる場としても機能できるはずです。昔からの環境を含めて、ここには信仰が生きている。明治以前の鵜戸神宮の姿を知ってもらうことが、これからの世代を育てていくことにつながるのです。少しずつではありますが、古い姿に戻しながら地域の観光に役立てていく。そうして日南地域の観光を良いものにしていきたいと思います。

先日、日南市の商工会議所が中心となって当社の運玉をモチーフにしたお菓子を開発しました。発売したばかりで認知はこれからなのですが、売り切れることが多く出足は順調のようです。今後はそのような連携にも、積極的に関わって行ければと考えています。

鵜戸神宮

〒887-0101
宮崎県日南市宮浦 3232
TEL：0987-29-1001
http://www.udojingu.com

JISYA NEWS

【新風】

NEW WIND

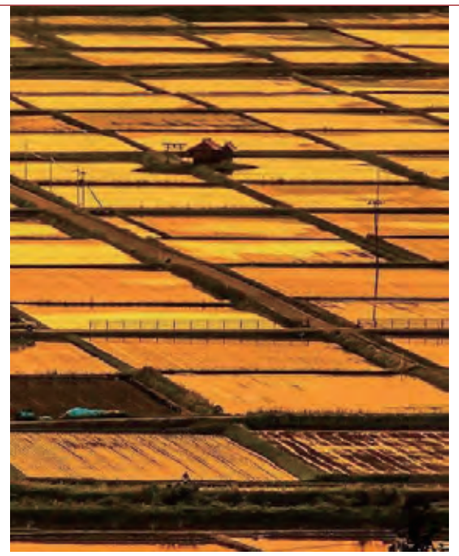
寺社に関わる新たな取り組みが、日々生まれています。その中から話題のSNSインスタグラムを活用した神社フォトコンテストの結果や、SNSで話題の知恩院の特設サイト、VR技術を用いて特別展と連動する作品製作を紹介します。

NEWS 1

神道青年全国協議会がインスタグラムを活用
神社フォトコンテスト「わたしと神社」を初開催

■7月1日から9月30日の日程で神道青年全国協議会がインスタグラム神社フォトコンテスト「わたしと神社」を初開催、このほど受賞作品が決まった。神社への関心が薄れていく昨今、神社への興味喚起や情報発信、好感度アップを目的に同協議会事業委員会が企画した本企画は、インターネット上で全国津々浦々の神社の美しさや魅力、祭りや人生儀礼の素晴らしさが発信・共有できるよう、10～40代からの認知度が高いインスタグラムを活用、全国から寄せられる力作を次々とページに掲載していった。スタート時には目標応募数を5000件と想定していたが、終わってみると、予想を3倍も上回る1万6220件の応募があり、またインスタグラムのフォロワー自体も5000人という嬉しい結果に。

応募作品の中には郷土の神社の祭りや景色など、撮影者それぞれの思いや誇りを感じるものが多く、主催者側も神社のあらたな魅力に気付くきっかけとなったという。来期の開催は今のところ未定だが、若い世代が神社に足を運ぶきっかけとなる可能性を秘めた企画ゆえ、引き続き開催が期待される。



★最優秀賞

「福島県喜多方市、恋人坂からの眺め」

〈評〉夕陽に染まり黄金色に輝く田園に、小さなお社と鳥居が見える。このような農村だけでなく、日本中どこにでも人々の暮らしと営みがあり、それを見守る神がいるということを多くの方が感じるのではないか

★特別審査員賞
写真家・中野晴生氏選

「新潟県新潟市、白山神社」

〈評〉お兄ちゃん、妹さんの楽しさが、後ろ姿、そして影からも伝わってくる。撮影されたのはお父さんかお母さんか。優しい眼差しが写真の画面を包んでいる

★優秀賞

「滋賀県高島市、白髭神社」

〈評〉先人たちが自然を敬い、感謝してきた思いが感じ取れる。心を落ち着かせてくれる一枚

「東京都世田谷区、奥澤神社」

〈評〉神社と日常を切り取った素晴らしい写真。鎮守様は地域と人々を見守り続ける

「地鎮祭の準備」

〈評〉親と一緒に子供が紙垂をつける姿に家族のつながりを感じ、物語が見られる素晴らしい写真

神道青年全国協議会
http://www.shinseikyo.net

神社フォトコンテストページ
https://jinjaphotocon.wixsite.com/info

NEWS 2

知恩院のライトアップ特設ページがSNSで話題
お坊さんを前に出すことで参詣するきっかけに

■浄土宗総本山知恩院の特設ページ「お坊さんに会いに行こう！ 知恩院秋のライトアップ2018」が、若い世代を中心に「どうした知恩院」「これは行くしかない！」など、SNSで話題になっている。

ページを覗いてみると、トップページには笑みをたたえた若い僧侶が数名。平成28年春のライトアップから、知恩院では「聞いてみよう！お坊さんのはなし」と題したプログラムを実施している。お堂で僧侶の話を聞いたり木魚を打ちながらの念仏体験ができる企画だが、親しみやすいお坊さんを前に出すことで「お寺へ行ってみたい」と思ってもらえるように、昨年からチラシに「お坊さんに会いに行こう！」と記載するようになった。今年はそれを一歩推し進め、ライトアップのタイトルにも加えた。また、特設ページでは僧侶の日常を〝ダンディ坊主〟や〝イケメン坊主〟といったコンセプトで紹介する動画も掲載、これも話題になっている。

これらの取り組みは、「皆さまをお迎えしたい」気持ちが出発点。僧侶の話を聞き、宗教的体験を通して感動を持ち帰ってもらい、お寺の在存に気付くきっかけ作りとしての挑戦は、功を奏しているようだ。

トップ画面では手をつないだ僧侶たちがジャンプして揺れている。それだけでも何やら楽しげな雰囲気が伝わってくる

浄土宗 総本山知恩院
〒605-8686 京都府京都市東山区林下町400
TEL：075-531-2111
http://www.chion-in.or.jp

〈 特設サイト 〉http://www.chion-in.or.jp/special/lightup_aut/

NEWS 3

特別展「国宝 東寺 ― 空海と仏像曼荼羅」と連動
東京国立博物館と凸版印刷が東寺の立体曼荼羅をVR化

■2019年3月26日から東京国立博物館で開催される特別展「国宝 東寺 ― 空海と仏像曼荼羅」に合わせ、凸版印刷のVR技術を用いた作品の製作が始まっている。

作品は、VRによる文化財の新しい鑑賞方法を体験できる同館東洋館内の「TNM & TOPPAN ミュージアムシアター」で、特別展との連動企画として3月27日から上演されるもの。弘法大師空海が密教の教えを日本で真言密教として確立させた歴史に加え、教王護国寺講堂の立体曼荼羅21尊を詳細に再現。現地では見ることが困難な角度や位置から一体一体を拡大するなど、VRならではの視点で立体曼荼羅を鑑賞できる作品となる。上演は超高精細4Kプロジェクタによる VR映像投影。

肉眼では鑑賞が難しい細かなディテールを拡大するなど、デジタルならではの文化財との出合い、楽しみ方が提案される。

言葉では伝えにくい密教の教えを視覚的に表す21尊の仏像で構成した、東寺講堂の立体曼荼羅

東寺講堂内に足場を組み、立体形状計測と高精細撮影で、21尊をデジタルアーカイブしていく

特集

映画やドラマのロケ誘致が、寺社の活性化につながる

フィルムコミッションとのタッグで魅力を発信

寺社に人を呼ぶためにPRは不可欠となっているが、どのような価値を訴求すべきか、悩ましいところ。しかしここ数年、映画やドラマの「ロケ地巡り」が寺社参詣の新たなコンテンツとして注目され、その陰で活躍しているのが、自治体のフィルムコミッション。彼らとの連携で、ロケ誘致を寺社PRに活用できるのか？

江戸時代には図会や書画が、寺社参詣を後押ししていた

自由に旅行ができなかった江戸時代、寺社参詣は旅行として許される数少ない手段だった。しかしほとんどの庶民には、各地の情報など入らない。そんな中で貴重な情報源となったのが、摂津や大和国、平安京、江戸など各地の寺社と宿場町の賑わいを描いた図会や参勤交代の道中を記した道中記、絵本などだったようだ。近世になると東海道や中山道などの街道とその宿場町が整備され、物資の流れに伴い大名や公家も街道を通って旅をする。その時の街の様子や風俗が図会や道中記のような書物として庶民に提供された。例えば延宝2（1674）年に徳川光圀が藩内巡見の際に鎌倉を経由して江戸に戻った際の記録をまとめた「鎌倉日記」が刊行されると、それが鎌倉観光の案内書として重宝された。これらは単に案内書としてだけではなく、そこに紹介されることで、各地の寺社の存在も知られることとなり、結果、参詣旅の盛り上がりにつながっていった。つまり寺社の存在を知ってもらうことで参拝者が増えていったという現象は、300年以上前から続いているのである。

国を挙げた支援体制でロケ誘致が活発化

内閣府知的財産戦略本部では「映画の振興施策に関する検討会議」を平成28（2016）年に設置し、国内外での映画のロケ誘致に関する議論を始めた。背景には全国的な盛り上がりを見せるフィルムコミッションによる誘致活動とその成功事例があり、また、映画コンテンツを活用した地域振興という目的もある。振興施策の策定にあたり、「ロケ撮影の環境整備のための支援」が検討されていることを考えると、今後もフィルムコミッションによる誘致活動は活発化していくのではないだろうか。

一方、映画やテレビドラマで寺社がロケの舞台として活用される事例が増加。加えてロケ後には「ロケ地巡り」と称して多くのファンが現地を訪れる動きも見られる。これらの事例から考えられるのは、ロケを誘致することが寺社活性化につながるのではないか、ということ。今回は2つの事例とフィルムコミッション側の意見を通して、可能性を探る。

【 フィルムコミッションとは 】

映画やテレビドラマ、CMなどあらゆるジャンルのロケーション撮影を誘致し、実際のロケをスムーズに進めるための非営利公的機関。日本にある多くのフィルムコミッションは都道府県や市町単位で組織され、国内だけでなく海外からの誘致活動も行っている。世界的な団体として昭和50（1975）年に組織された国際フィルムコミッショナーズ協会があり、欧米を中心に41カ国307団体で組織されている。日本では全国フィルム・コミッション連絡協議会が平成13（2001）年に誕生、平成21（2009）年にジャパン・フィルムコミッションとなった。

初代・二代目歌川広重が描いた「絵本江戸土産」には、全10編の中に、江戸で人気の場所だった寺社が説明と共に数多く描かれ、庶民の寺社参詣の参考になった。写真は第9編西新井大師。『千住街道より西へ入込こと半道許り常ゆも詣づる者あるべ』との説明が入る

事例

天台寺門宗 総本山園城寺 × 滋賀ロケーションオフィス

ロケに協力することで新たな参拝者と出会え気付いていなかった自坊の魅力もわかる。

天台寺門宗
総本山園城寺（三井寺）
〒520-0036
滋賀県大津市園城寺町246
TEL：077-522-2238
http://www.shiga-miidera.or.jp

上／『のみとり侍』（平成30年）右／『るろうに剣心』（平成24年）』右下／『柘榴坂の仇討ち』(平成26年)。現在は毎年映画やドラマが複数作品園城寺で撮影されている

魅力を伝え、発見するそのためのロケ協力

園城寺で映画やテレビの撮影が増えたのは、平成24（2012）年公開の映画『るろうに剣心』から。撮影にあたり、製作側がロケハンに何度も足を運んだだけでなく、1か月半余りにおよぶ準備の入念さに驚いた。「そこまでして、当寺院に価値を見いだしてくれたのかと、心打たれました」と執事補の小林慶吾氏は言う。以後、できるだけロケに協力していこうという思いが芽生えた。

実際に撮影が行われるまでには、現地を確認するロケハン、それを踏まえた複数回に及ぶ打ち合わせを経なければならない。ここをどれだけ入念に行うかがロケ成功の鍵となるのだが、その過程で小林氏は、相手の要望を知るたびに自坊の新たな価値にも気付かされ、その魅力を多くの人に伝えるためにロケに協力しているという。ただし、ここはお寺であり参拝者のための場所である、ということを製作側が理解してくれることが大前提となる。

「参拝者に迷惑をかけないということは必須条件です。そのうえでお互いの要望を出し合い、わかり合えれば、製作側はいいシーンを撮影でき、お寺側も新たな魅力を知ることができるのではないでしょうか」

ちなみに規模が大きな撮影では、実際にロケが始まると、現場は滋賀ロケーションオフィスに依頼する。参拝者の誘導方法などは、数々の撮影現場に立ち会ってきているロケーションオフィスが熟知しているため、任せることで参拝者は気持ちよく参拝し、映画の製作もスムーズに進むとの考えからだ。

「ロケーションオフィスのスタッフにもお寺を理解していただかなければなりません。これは情報交換を繰り返していくことでクリアできます。そうすると、ロケハン時に事前情報としてお寺のことをしっかり伝えてもらえます。それを踏まえてロケの話ができると安心ですね」

ロケに協力した作品が公開・放送されたあとは、ロケ地巡りをする人が増える。『るろうに剣心』公開後は、特に顕著だった。

「映画やテレビが、寺社に興味を持つきっかけになればと願っています。まずは来ていただき、石垣や建物、仏像など、何に心動かされるかはその方次第ですから。私たちがロケを通して新たな魅力に気付いたように、参拝者の皆さんも自分なりにお寺の良さに気付いてもらいたい。そのためのロケ協力だと考えています」

撮影が行われた場所には、作品名とロケ時の写真をセットにして案内板を設置した。また、参拝ルートの中で見ることができるロケ地をパンフレットにまとめた。「これもお寺を知ってもらうきっかけになる大切なことです」と小林氏

園城寺で撮影されるほとんどのロケに対応している小林慶吾執事補。平成25年に公開された映画『利休にたずねよ』では、ひょんなことから映画にも出演した

話し合える間口の広さがロケを成功させる秘訣

「撮影依頼が来たとき、私たちは脚本全体をできるだけ把握するように務めます。希望するシーンが無理だから話そのものがなくなる、というのではなく、そのシーンは近くの別の場所で代えられるなど、トータルで映画やドラマを誘致できるように進めていくのが私たちの役割です。ちなみに製作側のロケハンに際して寺社のご担当者に同席していただけると、細かな要望にも対応でき、誘致はよりスムーズに進みます。

ロケが印象的だったのは、若い世代が滋賀県へロケ地巡りに来るきっかけとなった『るろうに剣心』。ワイヤーアクションあり、爆破シーンありという過去にない時代劇が園城寺で撮影できたのは、園城寺さんに製作側の思いを理解していただけたからだと思います。境内での殺陣シーン、文化財の近くでのワイヤーや火薬の使用は、信仰や防災の観点から実現は難しいもの。しかし、製作側がそのシーンを撮影するために園城寺をどれだけ大切に考えているか、その思いを聞いていたからこそ間に入り、協議させていただくことにしました。話し合いをする間口の広さがあればこそ、難しい撮影も可能になる。このような撮影ができれば、その評判が製作スタッフ間で口コミとなって広がり、次の撮影につながっていくのだと思います」

滋賀ロケーションオフィスの増本喜久氏(左)と柴田智之氏(右)

滋賀ロケーションオフィス
〒520-8577 滋賀県大津市京町 4-1-1
滋賀県商工観光労働部観光交流局内
TEL：077-528-3745
http://www.shiga-location.jp

事例 二

祐徳稲荷神社 × 佐賀県フィルムコミッション

ロケ地ブームは終ってからが勝負。ニーズを読み取り一歩先ゆく努力を

祐徳稲荷神社

〒849-1321
佐賀県鹿島市古枝
TEL：0954-62-2151
https://www.yutokusan.jp

映画『タイムライン』のロケ風景。ロケはニュージーランドも候補地だったが、日本でも知られていない魅力がここにはある、と佐賀県でのロケが決定

観光から信仰を伝える取り組みが功を奏した

佐賀県鹿島市に鎮座する祐徳稲荷神社は、日本三大稲荷の一社に数えられ、年間300万人の参拝者が訪れる一大観光スポット。それが最近は海外の、特にタイからの観光客に熱狂的に受け入れられている。そのきっかけが、佐賀県フィルムコミッションによるロケ誘致だった。タイの映画『タイムライン』(平成26年)やドラマ『きもの秘伝』(平成27年)のロケ地として同社が選ばれ、作品は現地で大ヒット。これを期にロケ地巡りでタイからの観光客が押し寄せるようになった。しかし当時、鍋島朝寿権宮司は「今がゴールではない。ロケ地効果で盛り上がっても、ブームはすぐ終わる。そこからがスタート」と捉えた。

平成27年、ドラマのPRイベントでタイに招かれた際、仏教国であるタイの人々の信仰心に触れることができた。その時に、「いつか彼らの心が、観光から信仰に変わる時がくる」予感がしたという。帰国後、鍋島権宮司は自ら境内に出て、タイからの参拝者を見かけると話しかけ、声を聞くようにした。そこである言葉が引っかかったという。「日本はどんな印象?」という質問に対してタイの人たちは、「閉塞感がある」と答えたのである。それは日本ではタイ語の案内が少ないため目的地に着いても楽しみ方がわからず、彷徨っている感覚。そこで鍋島権宮司が取り組んだのが、タイ語のおみくじ作り。タイ語に精通した知人からアドバイスをもらい、対応してくれる業者を探した。結果、できあがったタイ語のおみくじは、タイからの観光客を大いに喜ばせることになった。ちなみに制作期間はわずか半年。「インバウンドはスピード勝負。時期尚早ということはない」という信念に基づき、鍋島権宮司は次々と精力的に動いた。ほかにも、タイにはない種なしの甘い鹿島産みかんを配ってPR。御神酒の意味を伝え、鹿島特産の酒を紹介することでその売上も増加。タイの人たちは楽しく深い観光ができたと満足し、取り組みは地域活性化にもつながった。

今では同社の神職はもとより、地元農家や商店、企業や行政が積極的に外国人観光客をもてなす流れができあがっている。神社としては、四季折々の神事に参加してもらうなど、体験型の取り組みも実施していきたいと鍋島権宮司。タイにとどまらず、世界の人々の「心に鎮座する神社」になることがゴールだ。

手水の順序はもちろん、参拝の仕方など、鍋島権宮司はタイ人の観光客を見かけると声をかけ、神社の作法を伝える

おみくじはより多くの外国人観光客を想定し、タイ語だけでなく、英語、中国語、台湾語、韓国語で書かれている

鍋島権宮司が心掛けたのは、直接のコミュニケーションによるニーズのリサーチ。そのため今では簡単なタイ語で会話できるまでになった

ロケ後の地域の頑張りが観光客を増やす原動力

「佐賀県に海外からのロケを誘致するPR活動にあたり、平成25年7月からビザが緩和されたタイをターゲットにしました。その際、祐徳稲荷神社については外国人によく知られた京都にも劣らない、日本らしい景観と見応えのある佇まいを魅力として発信していくことにしたのです。

活動が功を奏して映画のロケを誘致できたのですが、日本でロケをするからには、撮影する場所は事前申請が必要、観光客や地元住民が優先、ゴミの分別など、さまざまなルールをまず伝え、それを守ってもらうことを理解してもらいました。加えて祐徳稲荷神社では、ここはけっして行楽地ではないこと、参拝者や神社に迷惑をかけないことへの理解も徹底。ロケは成功、映画も現地で大人気となり、タイでの佐賀県の知名度は上がりましたが、現在のようにタイの人が多く訪れる流れが定着したのは、やはり祐徳稲荷神社のように、地域の方々が迎え入れるために頑張っていただけたことが何よりの理由ではないでしょうか。

祐徳稲荷神社でのその後の盛り上がりやタイの方々の感想などを通して思うのは、神社やお寺は日本を象徴する場所だということです。その魅力を海外の方に知ってもらえれば、日本そのものの良さがもっと広がっていくと感じています。

境内には、なんと外貨両替機が。日本円を両替する機会が少ない外国人のために設置したところ、門前町の売上が上がったという。また利用結果を分析して、どの国の利用者が多いかなど、リサーチにも役立てている

佐賀県フィルムコミッションの森岡 貴之氏

佐賀県フィルムコミッション

〒840-8570 佐賀県佐賀市城内 1-1-59
佐賀県庁新館 1 階
TEL : 0952-25-7296
http://www.saga-fc.jp

ジャパン・フィルムコミッション田中まこ理事長に聞く

「ロケで活性化する方法」

フィルムコミッションはあくまで紹介者。決定権は寺社にある

映画やテレビなどの映像製作者にロケ地を紹介して、撮影を支援するフィルムコミッション(FC)は、全国に300以上あります。FCのほとんどは自治体などが運営している公的機関。そして、FCや地方自治体が加盟しているネットワークであり、日本での撮影を希望している海外の製作者に対応する窓口の役割を果たしているのが、特定非営利活動法人ジャパン・フィルムコミッション(JFC)です。JFCは全国のFCや自治体がFCの業務内容やロケを地域活性化につなげるノウハウを学べる研修を提供しているほか、製作者とのマッチング、FC間の情報交換、FCの課題解決、海外作品の誘致活動も行っています。

書寫山圓教寺での『ラストサムライ』では、神戸市と姫路市が連携してロケを支援した。FCの連携も誘致につながる

寺社で撮影された映画やテレビ番組は数多くありますが、映画やドラマ、旅番組など、作品の種類や規模によって、ロケ地となった場所の知名度拡大は異なります。ですので、私たちにロケ支援の依頼があった際には作品名、企画書、台本、撮影の絵コンテなどを確認し、文化財の状況や行事の有無など寺社の現状と照らし合わせたうえで、製作者が求める寺社をご紹介しています。

私たちは、ロケ地を守ることを考慮しながらロケ誘致を行っていますが、最終的にロケを受け入れるかどうかは、寺社が判断するものです。依頼があった際には、「大切な施設を貸す価値があるか」を考えて検討していただければと思います。また、一度ロケ地になると撮影依頼が続くこともあります。その場合も、案件ごとに判断してください。

迷ったらFCへ相談。そのうえで活性化策を一緒に考えたい

ロケ地として活用してほしいと考えている場合も、まず地域のFCに相談してもらうのが一番です。寺社には街並みとは違う「守るべきもの」がたくさんあります。私たちは行政の一機関で、地元のために動いている団体ですから、ロケを誘致するだけでなく、地域の財産を守ることも重要な役割だと考えています。製作会社から直接撮影依頼が来た場合も、FCに相談してください。撮影協力を決めた後でも、仏像に照明を当てないでほしい、週末は法事が多いから撮影は避けてほしい、使用できる場所に限りがあるなど、相手に直接言いにくいことは私たちに伝えていただければ、製作側にきちんと伝えます。もちろん、撮影への協力を迷われているときは、ロケ地として協力することのメリットやデメリットを説明させていただきます。

大ヒット映画『世界の中心で、愛をさけぶ』では、作品の大事なロケ地として、四国のとある防波堤が登場しました。一見、どこにでもありそうな防波堤ですが、作品に登場したことが付加価値となり全国から若い人が足を運ぶようになりました。その人気を受け、地元では一度撤去した映画のセットとなった建物をあらためて再現したのです。

このように地域の財産は何なのかを考え、地域の人が意識していないものでも価値を上げることで新たな集客に結びつける、これもFCの重要な役割です。街でも寺社でも、その存在を知ってもらい、地域の魅力として発信する。そんなふうに、一本の作品をきっかけに地域を活性化できるよう、一緒に考え、一緒に活動していければ大変嬉しく思います。

ジャパン・フィルムコミッション 理事長
田中まこ

大阪府生まれ。少女時代をアメリカで過ごし、大学卒業後はエンターテイメント分野での番組制作、撮影のコーディネート、ラジオのDJなどを手がける。平成15(2003)年に国土交通省の「観光カリスマ」に選定され、同22年には観光庁の「YOKOSO！JAPAN大使」(現「VISIT！JAPAN大使」)に選定される。
平成28年4月より神戸フィルムオフィス顧問に就任(平成12年より代表、同28年3月退任)、現在に至る。ひょうごロケ支援Net会長としても活躍中。平成18年神戸市文化奨励賞受賞、同21年兵庫県文化功労者、同22年関西財界セミナー「輝ける女性賞」受賞。平成28年神戸市産業功労者賞受賞。

■各地のフィルムコミッション(現ブロック長FC)

※FCでは地域10ブロック化を推進し、地域間の連携強化による撮影環境整備等を図っている

①北海道ブロック
札幌フィルムコミッション
〒003-0005 札幌市白石区東札幌五条1丁目1-1
TEL：011-817-5711
http://www.screensapporo.jp

②東北ブロック
せんだい・宮城フィルムコミッション
〒980-0804 宮城県仙台市青葉区一番町3-3-20東日本不動産仙台一番町ビル6階
(公財)仙台観光国際協会内
TEL：022-393-8416
http://www.sendaimiyagi-fc.jp

③関東ブロック
東京フィルムコミッション
(東京ロケーションボックス)
〒162-0801 東京都新宿区山吹町346番地6日新ビル2階
TEL：03-5579-8464
http://www.locationbox.metro.tokyo.jp

④甲信越静ブロック
ながのフィルムコミッション
〒380-0835 長野県長野市新田町1485-1
長野市もんぜんぷら座4階(財)ながの観光CB内
TEL：026-223-6050
http://www.nagano-fc.org

⑤中部ブロック
なごや・ロケーション・ナビ
〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄2-10-19名古屋商工会議所ビル11階
TEL：052-202-1145
https://www.nagoya-info.jp/location

⑥近畿ブロック
大阪フィルム・カウンシル
〒542-0081 大阪府大阪市中央区南船場4-4-21りそな船場ビル5階
(公財)大阪観光コンベンション協会内
TEL：06-6282-5905
https://www.osaka-fc.jp

⑦中国ブロック
広島フィルム・コミッション
〒730-0011 広島県広島市中区基町5-44広島商工会議所ビル6階
TEL：082-554-1811
http://www.fc.hcvb.city.hiroshima.jp

⑧四国ブロック
えひめフィルム・コミッション
〒790-8570 愛媛県松山市一番町4-4-2愛媛県庁内
TEL：089-912-2491
https://www.jldb.bunka.go.jp/fan/filmcommissioners/detail/3801

⑨九州ブロック
北九州フィルム・コミッション
〒803-8501 福岡県北九州市小倉北区城内1-1北九州市役所市民文化スポーツ局内
TEL：093-582-2389
http://www.kitakyu-fc.com

⑩沖縄ブロック
沖縄フィルムオフィス
〒901-0152 沖縄県那覇市小禄1831-1沖縄産業支援センター2階
(財)沖縄観光CB内
TEL：098-859-6162
https://filmoffice.ocvb.or.jp

文化や伝統を未来へつなぎ、寺社を活性化させている人や活動。2つの事例を紹介します。

No. I

元アナウンサーの強みを生かして神道を「伝える」神職になる

笠森観音へ向かう参道途中に神社はある

「玉串料とは」で気づいた知ってもらう重要性

千葉県にある熊野神社の宮司・宮田修さん。どこかで見た顔…と思う人もいるだろう、前職はアナウンサーだ。

「40代半ばから千葉県内に古民家を借りて週末を過ごしていました。その古民家の大家さんが前宮司で、『人助けだと思って』と頼まれたことがきっかけとなり、平成14年に神職の資格を取ったのです」。その時はまだ、NHKの職員。アナウンサーと宮司という二足のわらじ生活が始まった。

「神職になりたての頃、お祭りの準備中に役員の一人が『玉串料とは何か』と聞いてきました。『祝詞』『祓詞』『献饌』『撤饌』…。神道の用語を、みんなよく理解していなかったんです。神道には『言挙げせず』と言って、多くを語らない文化があります。とはいえ中身を知れば、みんなが主体的にお祭りに参加できる。そこで私は、ご神前での所作を説明することから始めました」

「伝える」ことを生業とするアナウンサーと、「言挙げせず」を美徳とする神職。両方を知る宮田さんの言葉で、周囲は変わっていった。

「氏子地域は、お祭りなどを通して共同体の結束が強くなる。日本は災害の多い国ですから、そういう時こそ地域のつながりが非常に大事です。氏神様を守り、次の世代に引き継いでいく意味を、これからも伝えていきたいですね」

「神社は氏子さんたちのもの」と神道を広める、宮田 修さん

宮田さんのもとには、全国から講演依頼が届く。神道だけでなく、「元アナウンサーの神職」という自身についての話をすることも多い。現在は熊野神社を中心に近隣 32 社でも宮司を務めている

祈祷に使う「大麻(おおぬさ)」についても、「知らない人がほとんど」と宮田さん。祈祷の際には、その役割や意味などを毎回説明しているそう

天然記念物に指定されている笠森寺自然林の中に、ひっそりと立つ拝殿

【熊野(ゆや)神社】
〒297-0125 千葉県長生郡長南町笠森 208

No. 2

仏像の鑑賞方法を新たな視点で提案し、仏教とは？と気付いてもらう

シリーズ７まで続いている『見仏記』や『マイ仏教』など、著書も多数

いろいろな鑑賞法でいい最終的に仏教に気付けば

平成30年の第52回仏教伝道文化賞で沼田奨励賞を受賞した、漫画家でイラストレーターのみうらじゅん氏。仏像鑑賞の旅を著した『見仏記』（いとうせいこう氏との共著）や仏像グッズのプロデュース、〝仏像大使〟としての講演活動など、若い世代に向けての仏教発信と仏像ブームを牽引してきた功績を讃えられての受賞である。

今でこそ仏教界でも彼の活動は理解を得ているが、当初は怒られることの連続だったそう。それでも「宗教的とか美術的とか、そのような概念にとらわれるのではなく、新しい鑑賞方法への入口として、自分なりの解釈を提案してきました。新たな視点で仏像を見ていき、最終的に仏教に気付く、そんな方法でもいいのでは」という信念で活動を続けている。

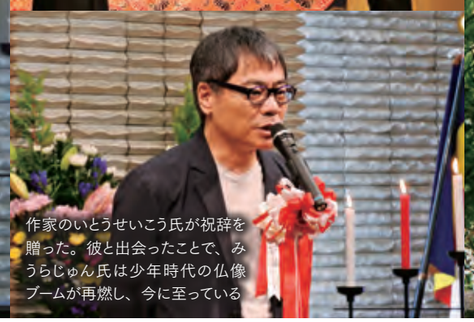
最近では、みうらじゅん氏と話す中で「寺の人間でよかった」と言う僧侶が増え、これまでやってきたことは無駄ではなかったと感じるようになった。また、次代を担う僧侶たちが先代の考えと調和しながら新たな価値を生み出すのもワクワクする。

仏像あるところ、ユーモアあり。全国各所へ足を運び、そこで自分なりに仏像を解釈し、おかしさを交えながら広めていく。そうして、これからを担う世代の心に「仏教とは？」という新たな種を蒔き続ける。何より、自分が一番楽しみながら。

仏教伝道文化賞沼田奨励賞を受賞した、みうらじゅんさん

少年時代は誕生日やクリスマスに法具を買ってもらっていたというみうらじゅん氏

受賞式では、公益財団法人仏教伝道協会木村清孝会長より、記念の盾が授与された



作家のいとうせいこう氏が祝辞を贈った。彼と出会ったことで、みうらじゅん氏は少年時代の仏像ブームが再燃し、今に至っている

【みうらじゅん】
みうらじゅん OFFICIAL SITE　http://miurajun.net/

OTAKARA

聖観音菩薩立像

【しょうかんのんぼさつりゅうぞう】

源頼朝公の菩提を弔うために祀られた三尊像

宝仏殿に納められている「帝釈天立像」(左)、「聖観音菩薩立像」(中央)、「梵天立像」(右)の三尊像。江戸時代に一度色を塗り直しているため、国宝になれなかったという経緯がある

寵愛を受けた住職寛伝がこだわった等身大頼朝観音

瀧山寺の宝物殿に納められた「聖観音」「梵天」「帝釈天」の三尊像は、建仁元年に運慶と息子の湛慶によって造られた。運慶の代表作として知られる東大寺南大門の金剛力士像が造られるより2年ほど前の、貴重な作品だ。時の住職・式部僧都寛伝上人が、従兄弟である将軍・源頼朝公の追善供養のために境内に惣持禅院を建て、その本尊と脇侍として三尊を祀りたいと、運慶に依頼したと伝えられている。

当時の本尊である聖観音の全長は174・4㎝。髻(もとどり)を除けば155㎝程度となり、頼朝の等身大で造られている。寺の歴史がまとめられた「瀧山寺縁起」には、聖観音の胎内に頼朝の遺髪と歯が収められていると記されており、実際にX線でその存在が証明された。

実は寛伝は一時、頼朝に推挙され日光の真言宗智山派・満願寺の住職を務めていたと伝えられている。天台宗の僧侶が真言宗の寺の住職を務めることは異例であり、いかに頼朝の寵愛を受けていたかうかがい知れる。だからこそ、頼朝が亡くなってなお、そこに生きている証として頼朝観音像を造り、自ら弔いたいと願い出たのではないだろうか。

隣接する瀧山東照宮へ参詣する人も、瀧山寺の宝物殿でこの像に会うと穏やかな表情に魅了されるという。思いも寄らぬ宝物が鎌倉ではなく愛知にある。その評判は、仏像ファンの間に広がっているようだ。

聖観音の口元あたりに、針金で吊るされた小さな箱が確認できる。ここに、顎髭(または鬢の落毛)と歯が入れられている

天台宗
吉祥陀羅尼山薬樹王院
瀧山寺(たきさんじ)
〒444-3173
愛知県岡崎市滝町字山籠 107
TEL：0564-46-2296
https://takisanji.net

これまでにも、さまざまな雑誌で取り上げられ、〝美仏〟として人気の高い聖観音菩薩立像の姿は、クリアファイルや一筆箋などのお土産にもなっている

OTAKARA

段威腹巻

【だんおどしはらまき】

智・仁・勇の武士・楠木正成公着用と伝わる鎧

播磨国竜野藩主脇坂家で家宝とされてきたが、明治24(1891)年に神社へ奉納された。国指定重要文化財

境内入って右手に墓所(上)、社殿左手奥に殉節地があり、二つを合わせて国指定文化財史蹟に指定されている。殉節地には、明治以降財閥による灯籠の寄進や政治家達からの寄付も集まった

楠木正成公の誠忠を静かに物語る鎧

湊川神社は明治5(1872)年創建と、まだ新しい。しかしこの地を人々が敬ってきた歴史は、室町時代に遡る。神社がある場所は楠木正成公が亡くなった地。豊臣秀吉の検地では免租地となり、江戸時代には水戸光圀公によって墓所が建立された。明治に入り、その忠義を後世に伝えるため明治天皇より創祀の御沙汰が下り、楠木正成公が主祭神としてお祀りされた。湊川神社に数ある宝物の、中でも別格なのが、国指定重要文化財の「段威腹巻」。宝物殿に飾られていて、今でもこれを見に訪れる人が跡を絶たない。

吉田松陰や高杉晋作、三条実美、坂本龍馬に西郷隆盛、大久保利通など、幕末から維新にかけては多くの志士たちも墓前に参ったという。その際は、墓碑に刻まれた光圀公直筆の「嗚呼忠臣楠子之墓」の拓本を持ち帰って家宝とした者も多かったとか。

神社にはほかにも、刀剣や武具、工芸品、絵画といった美術品が多く納められており、それらは宝物殿で定期的に展示されている。展示は年に数回入れ替えが行われるが、楠木正成公着用と伝わる段威腹巻や御真筆の法華経奥書などは、常に1階の展示室で見ることができる。

「参拝される方がいつお越しいただいても見られるよう、同じ場所にずっと展示するようにしています」と宝物殿の学芸員は語る。没後700年近く経った今でも、楠木正成公への市民の信奉は篤い。

湊川神社
〒650-0015
兵庫県神戸市中央区
多聞通 3-1-1
TEL：078-371-0001
http://www.minatogawajinja.or.jp

宝物殿1階にある楠木正成関連の展示室。奥中央にあるのは、横山大観「大楠公像」。大観が歴史上の人物を描くのは珍しい

特集2

死をカジュアルに語る新たな場

日本でも「デスカフェ」拡大中

海外発！

〝死〟は必ず訪れる。誰しもそれを理解しているはずなのだが、死について日常的に語ることは、なんとなくタブー視されてきた日本。しかし今、死をテーマにしたセミナーやワークショップが増えている。「デスカフェ」と呼ばれるこの活動、巷で盛んに開催されている「終活」とは少し違う。「デスカフェ」とは何なのか、なぜ日本を含め世界中で急拡大しているのか、事例を通して考えてみた。

まるでアフタヌーンティーを楽しむかのように人が集い、にこやかに死について話す。「デスカフェ」はこの独特の気軽な雰囲気が世界中で受け入れられ、急速に広まっている

生を有意義にするため死について語る場が誕生

デスカフェは今、世界60か国以上で開催されているという。スイスの社会学者ベルナルド・クレッターズが1982年に「死生学研究会」を立ち上げ、その後、伴侶との死別を機に「cafe mortel」を主催したことが始まりだとされ、そこからインスピレーションを受けたイギリスのジョン・アンダーウッド氏が「デスカフェ」という非営利組織を2011年に立ち上げた。組織のコンセプトは「限られた生を有意義なものにするために、死について考えよう」というもの。実際に開催された「デスカフェ」は参加費無料、カフェなどの店舗の一角でお菓子やドリンクと共に、初対面の人たちと死について語り合われた。

90年代以降、イギリスでは死について考え、議論する環境が社会的に整っていたことも、デスカフェ誕生の大きな要因だろう。また欧米では、60年代後半からデス・エデュケーション（日本では死への準備教育と訳されている）が盛んに行われており、死を語る土壌が醸成されつつあったことも背景にはある。

イギリスで「デスカフェ」が立ち上がり、話題となると、ヨーロッパを皮切りに一気にアジア各国まで広がっていった。「誰もが安心して死について話せる環境」「議論を誘導しない」「おいしいお菓子や飲み物を用意する」という堅苦しくないスタイルが、拡散し、受け入れられた理由だ。現在主流となっている「デスカフェ」は、先述の3項目に加え、「カウンセリングをする場ではない」「結論を出す場ではない」というルールもある。では何のために集まるのかというと、死についていろいろな人の意見を聞き、自分の考えをまとめてみる場、とでも言おうか。ともあれその波はもちろん日本にも及び、葬儀社や僧侶によって国内でも「デスカフェ」が開催されるようになってきている。

独自の展開を見せる日本の「デスカフェ」

しかし、葬儀社が開催しているものの多くは、「終活」の一環。遺言状の書き方など終末期の準備をするためのセミナーに近い。また、近親者を亡くされた方が、同じ悲しみを抱える者同士で支え合うことやグリーフケアを目的に開催している事例もある。主催者によって開催への思いは異なるのだが、共通しているのは「死について語る場を生み出す」ことの重要性だ。

そんな中、京都を中心に活動する若手僧侶グループ「ワカゾー」は、東京や京都の寺院を舞台に、若い世代をターゲットとする「デスカフェ」を開催、注目を集めている。定期的に開催され、参加者の年齢層は20代～40代の男女がほとんど。「ワカゾー」のメンバーは主に寺院の出身者で、加えてスピリチュアルケアやグリーフケアなどに関わった経験を持つ者も数名いる。ではなぜケアの延長線上で会を催すのではなく「デスカフェ」という選択をしたのだろうか。

「遺族とかでなくても、少しカジュアルに、死について気軽に語れる場所があってもいいのではないかと考えたからです」と言うのはメンバーの一人、霍野廣由（つるのこうゆう）氏。そんな彼らが開催している「デスカフェ」は、弔辞を二人一組で考え合ったり、死ぬ直前に伝えたいことを発表したり、死のイメージを絵にするなど、毎回テーマが異なる。カフェの実施に当たって大切にしているのは「死を話しやすいお題に代えてあげること。根本は死ぬことをどう思いますかと言っているのと同じです」

興味本位で構わない。まずは話してみよう

「ワカゾー」が「デスカフェ」を立ち上げたのは平成27年のこと。手探りで始めたことだったが、参加者と

デスカフェのルール

- ルール1　非営利で開催すること
- ルール2　誰もが安心して話せる環境づくり
- ルール3　議論を誘導しない
- ルール4　おいしいお菓子や飲み物を用意する
- ルール5　結論を出す場にしない

「ワカゾー」主宰の「デスカフェ」は、ほぼ隔月で開催。寺院の本堂を主な会場とし、年齢・性別・職業など、まるで異なる参加者が初対面で死について話をする。会話がスムーズに生まれるよう、「ワカゾー」メンバーはテーマやコンテンツを用意する

の会話を通して、寺院という環境に安心感を持つ人が多いこと、そして心の中にモヤモヤとある死への思いをどこかで出したいと思う人が意外と多いことに気付いた。その上、参加したことで心が軽くなったという人も多かった。看護師や消防士、葬儀会社勤務、リストカット経験のある人、終活中の高齢者など、毎回参加者のバックボーンはさまざまだが、「皆さんが参加に至った背景は気にしなくていいと思うんです。興味本位でも構わない。ちょっと話してみようかな、くらいの軽い気持ちで参加してもらえれば」と霍野氏。死について一人で考えているよりも、集まって話してみたら、新たなアイデアや気付きが得られるかも知れない、という程度の心づもりで参加してもらえればいい。ただしあまりにも自由で、場の流れに任せて楽しいだけの場になってしまうと良くないので、そこはメンバーがファシリテーター的に関わりながら、会のバランスを取っていく。「自分の中で抱えていた思いをこの場で出すと、その空いた部分に参加者との話を通して得たものが入っていくイメージですね」。

かつて、母子での参加者がいた。特に深刻な問題を抱えているわけではないのだけれど、母親は看護師、子供が死についてどういうイメージを持っているのかを知りたくて、いきなり話すのではなく、まず「デスカフェ」に参加してみたそう。子供が参加者の前で話す死についての思いを母親は客観的に聞き、母もまた、参加者の一人として話をする。その子供は「家に帰ってお母さんと続きの話をするんだ」と言って帰って行った。このように死について話すことをタブー視するのではなく、コミュニケーションの一つに加えてみる。そうすると親子だけでなく、いろいろな人間関係の質に変化が見られるかも知れない。確かにいきなり死について話すのは難しい。だからこそカフェで話を引き出してもらい、意見を出し合うという場の空気で、自分を少しだけ軽くするのだ。死についてちょっと気になっている人が集まり、カジュアルに死を語る場。その可能性は計り知れない。

僧侶という存在はモヤモヤをぶつけやすい？

ちなみに「ワカゾー」の「デスカフェ」は、東京や京都、大阪の寺院で開催されることが多い。また、本来のルールとは少し違う点もある。「カフェで開催しているわけでもないし、テーマを毎回決めているし、イギリスでのデスカフェとはだいぶ異なっていると思います。しかし死について話しづらい日本では、テーマを設定することが話しやすさにつながりますし、寺院という場所だからこその安心感もあると思います」

かくして「デスカフェ」は日本に上陸し、独自の進化を始めている。確かに一般的には僧侶に相談すると諭してもらえるといったイメージを持つ人も多い。また寺院は漠然とした安心感を得られる場所と捉えられていることも、話しやすさの前提にある。「お寺で開催されるなら、お坊さんが話してくれるなら行ってみようかな、という気持ちが参加してくれる人たちにはあるようです。これってお寺の可能性ではないでしょうか。お寺という場所は、死で終わらない物語が紡がれてきた場所だと思うんです。だからこそデスカフェを開催する意義があると感じています」。

「デスカフェ」の可能性は寺院の可能性でもある。また、僧侶が主催していることが広まり、ほかの寺院でも僧侶の方が「うちでもやってみよう」と思ってもらえたら嬉しいと霍野氏。もちろん、寺院の有効活用にもつながるだろう。

イギリスで誕生した「デスカフェ」には、宗教関係者が必ずしも関係していなかった。しかし日本では、宗教者が積極的に関わることで多くの人の心を穏やかにできるのではないだろうか。またその先には、寺院の活性化、地域の活性化への道も見えてくるように感じる。

明るく死を語ることで コミュニケーションも広がり、寺院の可能性も広がっていく。

共に実家が浄土真宗寺院という「ワカゾー」メンバーの霍野廣由氏（右）と藤井一葉さん（左）。会の運営では、明るさやリズム感を意識している

【社寺観光による地域振興を推進するため モデル地域を選定し、議論を深める】

社寺観光研究会 第3回会合を9月に実施

2つの分科会による報告で今後に向けた議論が活発化

全日本社寺観光連盟が主催する社寺観光研究会第3回会合が9月6日に衆議院第二議員会館で実施され、2つの分科会によるこれまでの議論内容が報告された。

社寺観光開発分科会では、対象社寺を明確にし、その特定社寺と地域社会が抱える課題へ具体的に提供できるソリューションを考えるという第1回の議論テーマを受け、対象となった神社を例に、宮司との会合の内容、そこから導き出された課題や将来性について報告。また、必要なソリューションをより明確にすることも議論のテーマとして挙げられた。

宿坊事業促進分科会では、地域を活性化するために宿坊を活用する際のメリット・デメリットを議論した第1回を発展させ、モデルケースとなる宿坊の立ち上げに伴うエリアとして伊豆・伊東方面を選定、宿坊展開を考えている社寺の補助金活用などに関する政策提言、社寺が宿坊や簡易宿泊に新たに取り組みやすい法律改正の提言が報告された。

興味深かったのは、岩手県釜石市の仏教会が釜石市と防災協定を結んだことが評議員から話題提供されるなど、地域振興の促進に社寺を活用する点において、観光だけでなく災害時の地域の避難所としての価値にまで議論が及んだこと。

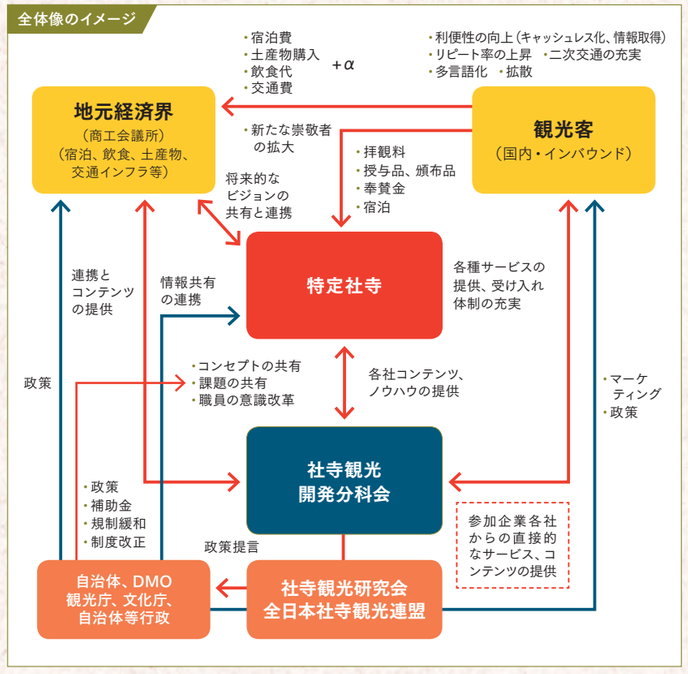
事業の展開を探るためにマーケティングが急務

参考資料にもあるように、訪日旅行者の動向は旅前、旅中で変化している。また、観光地としての集客要素には見どころの数(量)と興味を引くコンテンツ(質)があるが、現状では多くの訪日旅行者の訪問先が見どころの数(量)が多い地域に集中していることも見えてきている。そのため、量を増やすことのできない観光地では質を高める必要がある。今後も訪日旅行者が増加することを考えると、実態の把握が急務と考えられ、そこから今後の施策を導き出さねばならない。

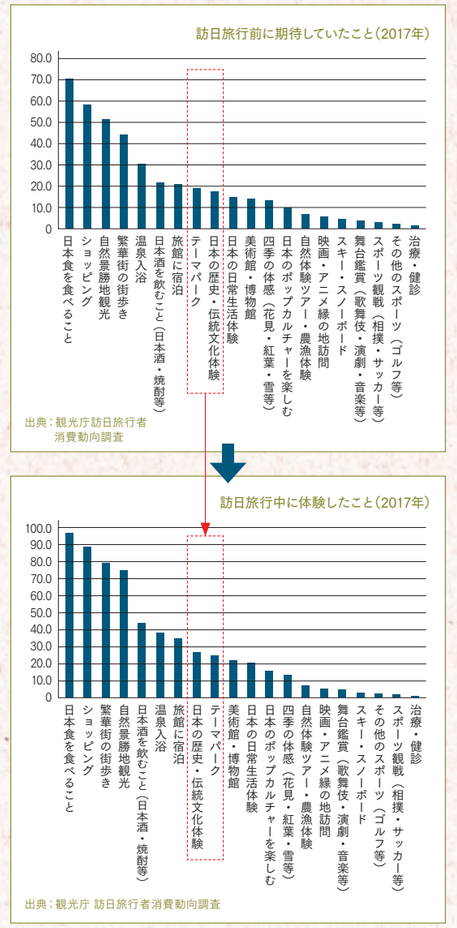
今回の研究会では、各分科会からの報告後に設けられた質疑応答の場面で、インバウンド需要におけるマーケティングの必要性、そこから見えてくるプロモーションの検討などにも話が及んだ。さらに、宿坊事業促進分科会への質疑では、付加価値の高い食事など地域の収益につなげる仕組み、人材育成とそれを関係機関が支える仕組みを作ることなども話題となり、有益な議論の場となった。

今回の結果を受け、第4回の研究会に向けて社寺観光による地域振興実現のためにさらなる議論の深化を求めることとなる。

社寺観光開発分科会が作成した、特定社寺を対象としたプロジェクトの全体イメージ。分科会、社寺観光研究会、全日本社寺観光連盟と関係各所との密な連携の必要性が見て取れる



■ 参考／訪日旅行者の実情



2017年の調査によると、訪日旅行者が旅行前に日本での観光に期待していたことと、旅行中に体験したことが微妙に異なっている。自然・景勝地観光が実際は繁華街の街歩きよりも減少したが、テーマパークよりも日本の歴史・伝統文化体験の数値が上昇していることは興味深い。また、食や温泉、宿泊は多くの外国人が求める強いコンテンツとなっている。

「社寺観光研究会」に関する問い合わせ先
一般社団法人全日本社寺観光連盟
〒107-0052 東京都港区赤坂2-8-16赤坂光和ビル2階
TEL：03-6416-0166　e-mail：info@jtast.jp
〈ホームページ〉http://jtast.jp

PICK UP NEWS

全日本社寺観光連盟野田理事が広島県神社庁研修会にて講演

神社界とは異なる視点で幅広い問題について講義

9月4日、広島県神社庁において、全日本社寺観光連盟野田博明理事による講演が行われた。「悪戯小僧の脳神道」という演題にて、前半では日本書紀から紐解いた神道の話や神社や鎮守の森への現代人の心の回帰について講義。後半には、2040年には全国にある神社の約40%、実に31・184社が消滅するおそれが高いことに触れた(※注)。

さらに、これまで存続を支えてきた“世帯”に着眼し、先述の分析数字に世帯数を加味した一神社あたりの氏子世帯による負担力についての試算や広島県の数値結果にも触れたのち、神社を取り巻く課題について紹介した。

その上で、限界市町村にある一神社あたりの世帯数、世帯の経済力や氏子比率から見ても現状は予断を許さない状況であることを説明。このことを考えると、日本国憲法では政教分離に関して厳格に規定されているものの、こと限界・消滅社寺の復活に向けた限界集落にある人々による地道な活動や運動に際しては税金の活用を検討する時期に来ているのではないか、との提言も行った。

加えて、この状況下を打破するための参考事例として、中越地震後の平成18年に行政が社寺復興のために行った「地域コミュニティ等再建支援事業」の中に「鎮守・神社・堂・祠」の再建支援が追加されたことを紹介し、この実例を受けて平時にどうするべきか、という点にまで話が及んだ。

鎮守の森の保存・維持、そのための人材確保。また地域の人々に愛される神社であるために場を提供していくこと。さらに地域の核となるためにどのような活動をするべきか、学校や行政への積極的な働きかけはもちろん、若者や子供への呼びかけの必要性にも触れ、コミュニティ復活の種は神社の内にこそあると力説した野田理事。

全国の神社が置かれている状況は、人口減少、産業衰退など現在日本の多くの地域が直面している問題と密接に関係している。それを踏まえ、今こそ地域の神社が行動を起こすべきだと締めくくった。

※注 出典『平成27年1月「神道宗教・第237号－神社神道と限界集落化（石井研士國學院大學教授）」』

境内から眺める阿蘇山。観光写真などでよく見る表からの景観と違い、広い空の下、凛々しい姿でそこにある

テラハクレポート

阿蘇山を間近に眺める自然豊かな里の坊

雄大な山の眺めに水、野菜、そして空気。土地のすべてでもてなす

真宗大谷派
月象山了廣寺（げっしょうざんりょうこうじ）
〒869-1412
熊本県阿蘇郡南阿蘇村久石427
TEL：0967-62-9554

住職夫妻の手作り料理も訪れる大きな目的に

2016年4月に発生した熊本大地震では、承応2（1653）年に開基、寛文6（1666）年に本堂が完成して以来続く了廣寺も被害を受けた。ちょうどその頃、小林智征（ともゆき）住職が宿坊の開設準備を進めていたのだが、それから2年経った今年5月、ようやく運営をスタート。宿の魅力はなんと言っても、田園風景の先に横たわる雄大な阿蘇山の眺望。そして豊かな湧水という、阿蘇の大地が育んできた恵み。一部運行を再開した南阿蘇鉄道のトロッコに揺られ、阿蘇白川駅から徒歩15分ほど。宿に入ってひと息ついたあとは、多くの時間を周辺散策に費やしたくなる。

こちらでは、実は食事も大いなる楽しみ。夕食は地元で法事のあとに出されるお斎をベースにした精進料理なのだが、野菜は先代住職が畑で丹精込めて育てているもの。滋味深い野菜を中心に坊守がコース仕立てで供する創作料理は、阿蘇の旬を存分に感じさせてくれる。そして翌朝は、住職自ら生地をこね、焼く「精進パン」がごちそう。

境内の一角にパン工房があり、専用のオーブンも備えている。そこで熊本県産の小麦粉と南阿蘇の地下水を使って食パンを毎朝焼く。食パンは10種類ほど、きな粉やゴマを混ぜたもの、あん入り、米粉や全粒粉のパンもあり、これが外国からの客に「ビーガン（完全菜食主義）」として好評なのだとか。地域の病院にも卸し、喜ばれている。

「素朴なものしかありません。でも、それが一番のもてなしだと感じています」と小林住職。

地震で被害を受けた本堂の完全な再建は、まだ道半ば。しかし、復興に併せて納骨堂の整備も検討しているという。

「この環境を気に入った全国の方に納骨していただき、ご先祖様に会いに、南阿蘇へ来ていただければ。そうすることで村もきっと元気になりますし、何より、訪れたみなさんを優しく包んでくれるのが、この阿蘇の大地なのです」

一日一組をじっくりもてなしてくれる宿坊。元気をもらえる野菜、熊本の人たちの心を支え続ける阿蘇山、そして悠久の自然は、四季を通じて楽しみに訪れたい魅力的なコンテンツだ。

先代が近くに畑を構え、育てている野菜は種類が豊富。おいしい水をたっぷり吸った野菜は色艶もいい。その日に採れる野菜によってメニューを組み立てている、坊守の精進料理は彩り豊か

寺院から徒歩数分の所には、地元の人たちが「阿蘇で一番おいしい水」と言う竹崎水源が。毎分120トンもの水量で湧き、ほのかな甘さがある

地元の商工会理事も務め、村の活性化も考える小林住職と坊守の光里（あかり）さんが二人三脚で寺と宿を守る

本格的な機器を備えたパン工房。パンの作り方を学んだ住職が、試行錯誤して「精進パン」を生み出した。朝食はスープやサラダ、スムージーと共に「精進パン」が楽しめる

本堂横の建物を改装して宿坊に。ロビー兼談話室には訪れた人がここを拠点に動けるよう、南阿蘇の観光に役立つパンフレットなども置いている

宿泊スペースは築150年近い建物の柱などをそのまま使いながら、モダンな仕様にしたやわらかな雰囲気。寝室（上）、居間（左上）、ダイニング（左下）、バス、トイレ完備。ベッドには畳を使っていて、寝室の障子を開けると、阿蘇の自然が目の前に

宿泊で寺社と地域を元気にする
WEBサービス「テラハク」
http://terahaku.jp
TEL：06-6356-2090（株式会社 和空）

風まかせ

第22回

特別寄稿
野田 博明

白にあらずして黄なると、城は誠に奇妙なり

古代山城に関わる壮大な「城の物語」から思索の旅は遠く大和王朝の時代へ。福岡、香川、対馬に岡山・・・やがて行き着いたのは式内社、名神大社そして御祭神を巡る大いなる謎へ。

少し前のNHK朝の連続小説〝ひよっこ〟で、木村佳乃さん演じる主人公の母が消息を絶った夫の捜索願を出そうと赤坂警察署に行き、「茨城です。イバラ・ギじゃなくて、イバラ・キです」と悔し涙を零しながら訴えるシーンは多くの視聴者の涙を誘った。

その茨城県の地名の由来は遠く常陸国風土記にまでさかのぼる。そこには大和王朝がこの地を征圧するために「茨で城を造った」ので茨城と名付けたのだと書いてある。ここで、城は〝キ〟と訓むが、日本書紀で初めて城が登場する記述でも、「稲を積み城に作る。これを稲城と謂う」と、キと訓み下している。

また、書紀は蝦夷征伐の前哨基地として越の国に渟足柵を造ったと誌す。この防塞の柵もサクではなくキと訓み、古代、土・石塁や木柵を廻らせた軍事施設はなべてキと呼ばれていたことがわかる。そのキのなかで、柵は主に8世紀以降、蝦夷を征圧する目的で東北の地に造られたことが正史にはっきりと記載されている。一方で、北部九州と瀬戸内沿岸に集中する城、古代山城の多くがその時期、築城者等不明で謎に包まれている。

冒頭、連続テレビ小説の茨城県まで引き合いに出したのも、予て奇妙に思っていた「城の物語」について語ろうと思ったからである。その古代山城は現在29か所の存在が確認されているが、茨の城を造った頃とはその規模に大きな違いがある。大規模な大野城（福岡県）や城山城（香川県）は土塁・石垣の総延長が6㎞超、郭内面積は170～180haにもおよび、国宝の姫路城（23ha）の7倍強もの規模を誇る。最小のおつぼ山城（佐賀県）や鹿毛馬城（福岡県）でさえ18haもあるのだ。時代性を考えれば、そのとんでもない宏大さがより実感できるのではないだろうか。

1

そんな古代山城だが、書紀など文献記載の城は対馬の金田城、大宰府の大野城と基肄城、瀬戸内海入口の長門の城や出口の讃岐の屋島城、そして河内の高安城など13か所を数える。それらは大和王朝が造営した氏素性の明確な城で、学術上、朝鮮式山城と分類されている。その建造年次と築城地域を考え合わせると、当時の緊迫した北東アジア情勢を反映したものとその目的も容易に推察できる。

2

奇

妙なのは残る16か所の神籠石系山城といわれる一群の城のことなのである。一切、正史に名を留めず、時代は下って江戸中期の地誌で高良山（久留米市）山腹を囲む列石遺構が霊域を護る神籠石であると紹介されて初めて世に登場した。

この高良山城や城山城、鬼ノ城

3

1. 鬼の城西門と角楼（岡山県総社市） 2. 高良山・神籠石（福岡県久留米市） 3. 城山の中腹に築かれた金田城

4

（岡山県）といった神籠石系山城こそ、いつ、だれが、何の目的で建造したのか未だ定説がない。正史に全て載るほうがおかしいとの主張もあるが、同じ讃岐国に位置する屋島城を記載し、その倍の規模もあろうかという城山城の造営にひと言も触れないのはやはり不自然である。高安城などは築城や修理、天皇の行幸といったことまで書紀や続日本紀に11回も事細かに記載されているというのに。

で

は、何故かとなるが、それは大和王朝が築城者ではないからというのが自然な答えとなろう。そう考えたとき、16城の築かれた地域が俄然ある意味合いを帯び、大和に反旗を翻した紀の記述が脳裏に浮かびあがってくる。それは、5世紀から6世紀に勃発した吉備氏の反乱であり、筑紫君・磐井の反乱である。

これらの事件は内乱と看做されているが、事実は大和王朝が全国支配を進めていく節目の各地大豪族との天下分け目の大戦であったのではないか。現に、磐井の乱を紀は、その出陣式において継体天皇が「国家の存亡はこの一戦にある」、「磐井殲滅の暁には、長門以東は朕が支配するが、以西は将軍が治めてよい」と訓示したと記す。これは九州が未だ大和の支配下になく、大和に帰順しない国々の存在を図らずも語ってしまったというしかない。支配が確立しておれば、征討将軍に統治権を渡すなどあり得ぬ話であるし、皇国の興廃という表現は国家間の乾坤一擲の戦いにこそふさわしい檄文であるからである。

そこで、神籠石系山城の配置を軍事的視点で俯瞰し直してみると、筑紫国が朝鮮半島からの外寇への防塁として北面に対し備え、新興著しい大和王朝への防塞として東方面に対し城を造営したことが胸にストンと落ちてくる。吉備国の鬼ノ城や讃岐国の城山城も各々が自国防衛の中核城塞として築かれたと考えれば、大規模な城であっても築城はもちろん修復など大和王朝の正史に一行の記述もないのは逆に当然のことといえるのかも知れない。

5

6

この話、荒唐無稽というなかれ。さらに寺社NOWのコラムなのに社寺がないとのクレームに対して、最後に大風呂敷をきちんと畳んでみせねばならない。実は、この代表的な神籠石系山城の鎮守社（吉備津神社・高良大社・城山神社）はすべて式内社でかつ名神大社という特等の格式を有していることが一つの傍証といえるのではないか。さらにその御祭神の二柱はその国を造った神様（国造の始祖）であり、また、高良大社の高良玉垂命にいたっては正一位を授かっているにも拘らず、記紀にその名を一切、顕わさない、謎めいた神様となっている。それは、最上級の敬意を払わなければならないが正史には絶対、名前を残したくない、なぜなら……。というところで酔いどれの筆は止めておいたほうがよさそうだ。

4. 高良大社社殿 5. 吉備津神社の右手拝殿と比翼屋根の本殿 6. 城山神社（香川県・坂出市）

野田博明
のだ ひろあき

昭和26年生まれ。東大卒。日本興業銀行広報部長などを経て、現在、一般社団法人全日本社寺観光連盟理事。平成27年文化庁・観光庁共管の「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」、平成29年文化庁「文化財の多言語解説等による国際発信力強化の方策に関する有識者会議」委員。

四国霊場 57番・栄福寺にて

JTB

感動のそばに、いつも。

人をつなぐ、笑顔をつなぐ。
JTBは地球を舞台に、
あらゆる交流を創造し続けます。

天台寺門宗 総本山園城寺で行われた映画『るろうに剣心』の撮影風景。何気ない竹藪も、撮影現場として魅力的だった（特集1より）

寺社Now

Vol.22

編集後記

寺社へのロケ誘致について、ジャパン・フィルムコミッション田中理事長にお話を伺った際、「私たちは撮影地を守る側です」のひと言に、強い思いを感じました。寺社を撮影地や題材に製作されるさまざまな作品を通して、その価値を上げたい―。寺社の未来を考える仲間は多いのだと、勇気づけられました。　（H）

全国各地の「テラハク」登録寺院を訪れ、お話しを伺うのがいい経験になっています。宿坊を始めた理由はそれぞれ。そこには、さまざまな思いや願い、そして祈りが。そうした思いや願いを未来へとつなげていくために少しでもお役に立つことができればと覚悟する毎日です。　（W）

無料送付の継続希望

「寺社 Now」無料送付の継続をご希望の場合、[寺社名・氏名・住所・電話番号] をご記入のうえ、下記 FAX またはメールアドレス宛にお送りください。ご意見・ご感想もお待ちしております。

バックナンバーが
WEBでご覧いただけます

jisya-now.com

または　寺社NOW　検索

お問合せ

一般社団法人
全国寺社観光協会 本部事務局

TEL：06-6360-9838　FAX：06-6360-9848
e-mail：info@jisya-kk.jp

次号は
2019年1月発行の
予定です。

監修
一般社団法人 全日本社寺観光連盟

発行人
一般社団法人 全国寺社観光協会

編集・制作協力
株式会社 glass

発行所
一般社団法人全国寺社観光協会（事務局）
〒530-0044
大阪府大阪市北区東天満 1丁目 11番 13号
AXIS 南森町ビル 11F
Tel : 06-6360-9838　Fax : 06-6360-9848

寺社 Now
第 22 号　平成 30 年 11月発行

本誌の表紙、記事、写真、イラストはすべて著作権法で保護されています。発行人の許諾なしに複写(コピー)したり、印刷物やインターネットのWEBサイト、メール等に転載したりすることは違法となります。

寺社Now Vol.22

【監修】一般社団法人 全日本社寺観光連盟 【発行】一般社団法人 全国寺社観光協会 （事務局）〒530-0044 大阪府大阪市北区東天満1丁目11番13号 AXIS 南森町ビル11F Tel:06-6360-9838 Fax:06-6360-9848

挑戦の数だけ、保険がある。

保険は、冒険から生まれた。
大航海という挑戦を助けるために、
勇気をつくるために、
保険は生まれた。

さあ、挑戦しよう。
人は何かを始めることで前へ進み、
世界は新しく変わってゆく。
不安も、きっとあるだろう。
でもそれは、分かち合うことで軽くなる。

世の中には2種類の人がいる。
挑戦する人、しない人。
充実した人生を送るのは、
どちらの人だろう。
人から愛され尊敬されるのは、
どちらの人だろう。
世の中を変えていくのは、
どちらの人だろう。

私たちはすべての挑戦を応援します。

To Be a ***Good Company***

東京海上日動

JAPAN

TOKIO MARINE NICHIDO

JOCゴールドパートナー（損害保険）